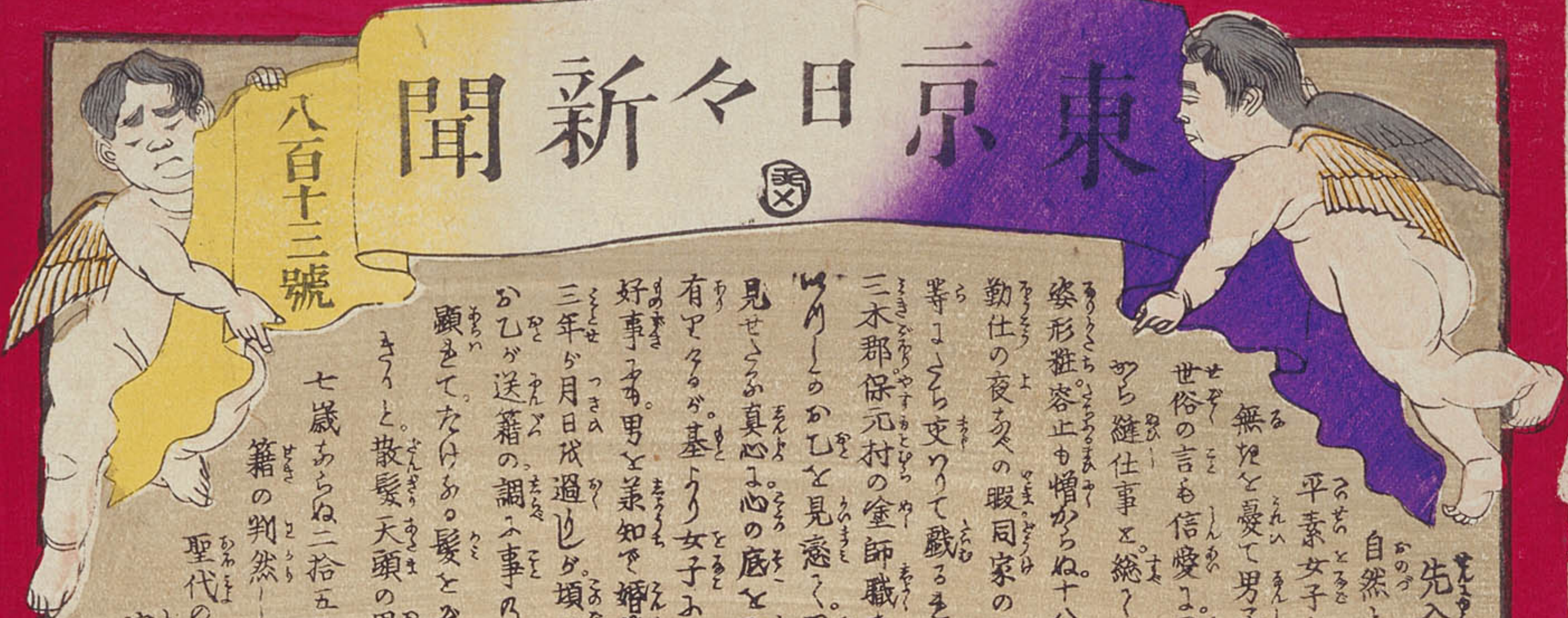


東京日々新聞

八百十三號



先入主とあるより古人の確言馴るよりよきて性も又
 自然と愛する物なるは讃州香川の郡ある東上の村内よ
 平素女子と思ひたるおしが両親の兒育の
 無礼と愛する男子あり女子の名と付け育てよう
 世俗の言も信受し暑さ寒さの衣類より髪化粧
 さら縫仕事と総て女子に操擬せしむ習ひが氣質と
 姿形粧容止も憎からぬ十八歳に同國ある高松藩の某へ嫁
 勤仕の夜更の暇同家の殿女と交通あり近隣婦女子
 等より支りて戯るも更ふ疑へ人もあらず然るも同國
 二本郡保元村の塗師職たる早藏と呼ぶ男あり
 づりしのかしと見惑く思ひの文と撮合せ本地と
 見せしめ真心の底と研出して云ふ事
 有てたるが基より女子みあらざると窮ふ語を
 好事者男と兼知で婚禮あり
 三年の月日代過也頃日
 か乙が送箱の調ふ事あり
 願きてたけあ髪とから
 まくと散髪天頭の男よま
 七歳あらぬ二拾五で男女の
 籍の判然は是赫々
 聖代の御恩澤と云ふもの
 實に痴愚譚よりぞ



墨陀西所
 温克龍吟誌

一蕙齋芳幾

大形
 具足屋
 度辺影米

